

第61回 大阪母性衛生学会学術集会

会 長：橋 大介(大阪公立大学大学院医学研究科 女性生涯医学 教授)

学術集会長：荻田 和秀(りんくう総合医療センター産婦人科部長/周産期センター長)

< 研修会 >

●日 時：2022年12月4日(日) 9時35分～12時15分 (予定)

●場 所：〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3

大阪公立大学医学部 学舎4F 大講義室/中講義室

●テーマ：「周産期における理論と実践の融合」

●座 長：遠藤 誠之 先生(大阪大学医学部 保健学専攻 生命育成看護科学講座 教授)

●演 者：「外国人妊婦への対応」 9時35分～10時35分

土井 智恵子 先生(りんくう総合医療センター 助産師)

「周産期救急の理論と実践の融合」 10時45分～12時15分

荻田 和秀 先生(りんくう総合医療センター産婦人科部長/周産期センター長)

◆日産婦学会単位【10単位】と日本産婦人科医会研修会参加証シールを交付します。

ご参加の医師各位は「e医学会カード」をご持参ください。

◆日本専門医機構共通講習単位【産婦人科領域】(1単位)/【医療安全】(1単位) 交付予定

ご参加の医師各位は「e医学会カード」をご持参ください。参加登録は退室時に行います。

◆「周産期における理論と実践の融合」では、日本助産評価機構個人認証事務局より助産実践能力習熟段階(クリニカルラダーCLOCMIP®)レベルⅢの認証申請・更新に認められた必須研修「緊急対応」の受講証明書を発行します。

証明書発行をご希望の方には、研修会の受付時に助産師免許番号を確認いたします。ご準備の上、ご来場ください。

◆「外国人妊婦への対応」の受講証明書は、助産実践能力習熟段階(クリニカルラダーCLOCMIP®)レベルⅢの認証申請・更新のための選択研修に使用可能です。

< 総 会 >

日 時：2022年12月4日(日) 13時35分～14時 (予定)

場 所：同上

< 学術集会 >

日 時：2022年12月4日(日) 14時10分～17時 (予定)

場 所：同上

参加費：一般：5,000円(学生2,500円)

※大阪産婦人科医会ご所属の医師は、年会費は徴収済みですので、弊会でのお支払いは不要でございます。

後援：大阪産婦人科医会/大阪府看護協会/大阪府助産師会/OGCS看護師・助産師会

Time Schedule

	時 間	内 容 (演者および進行)
オリエンテーション	9 : 25 ~ 9 : 30	
会長挨拶	9 : 30 ~ 9 : 35	橘 大介
研修会	9 : 35 ~ 10 : 35	研修会① 土井千恵子 先生
	10 : 35 ~ 10 : 45	休憩 (10 分間)
	10 : 45 ~ 12 : 15	研修会② 荻田和秀 先生
ランチョンセミナー	12 : 25 ~ 13 : 25	演者：岡田英孝 先生 関西医科大学産婦人科教授 座長：玉上麻美
総 会	13 : 35 ~ 14 : 00	
学術集会長挨拶	14 : 00 ~ 14 : 05	荻田和秀 先生
オリエンテーション	14 : 05 ~ 14 : 10	
学術集会 (演題数：13)	14 : 10 ~ 14 : 50	第1群 【5題】
	14 : 50 ~ 15 : 00	休憩 (10 分間)
	15 : 00 ~ 15 : 40	第2群 【4題】
	15 : 40 ~ 15 : 50	休憩 (10 分間)
	15 : 50 ~ 16 : 14	第3群 【4題】
授賞式	16 : 20 ~ 16 : 40	第60回学術集会奨励賞 竹村喬記念奨励賞 演題発表
閉会挨拶	16 : 40 ~ 16 : 50	橘 大介

学術集会プログラム

学術集会長：荻田 和秀(りんくう総合医療センター産婦人科部長/周産期センター長)

※○が発表者

第1群【5題】14:10～14:25

座長 田中 春美先生(市立東大阪医療センター副院長/看護監)

1. 新型コロナウイルス感染症妊婦に対する経膈分娩の取り組み

○泉川 良子, 谷口 恵子, 佐野加緒里, 高島麻由美
(地方独立行政法人 りんくう総合医療センター)

2. コロナ禍における当院での分娩の取り組み

○番匠谷麻貴子¹⁾, 北野 園枝¹⁾, 北野美代子¹⁾, 勝藤久美子¹⁾, 江口美智子¹⁾,
高崎 理奈¹⁾, 根来 英典¹⁾, 谷口 武¹⁾
(医療法人 定生会 谷口病院¹⁾)

3. COVID-19 隔離中に分娩となった母親への産前産後の支援

○伊藤 幸子¹⁾, 粉川 香織¹⁾, 土居 暁¹⁾, 今井 明子¹⁾, 谷口 武¹⁾
(医療法人 定生会 谷口病院¹⁾)

4. コロナ禍での育児指導経験より得られた母子同室・異室の当院における今後の課題

○草刈 典子¹⁾, 山口富士子¹⁾, 島津 初美, 英 都貴子¹⁾
(大阪医科薬科大学病院¹⁾)

5. A病院におけるコロナ妊産褥婦専門病棟のケアとマネジメント

○英 都貴子
(大阪医科薬科大学病院)

第2群【4題】15:00～15:40

座長：中嶋 有加里(大阪公立大学大学院看護学研究科 母性看護学・助産学分野 准教授)

6. コロナ禍における妊婦が抱える不安の実態

○寺田 真理¹⁾, 大井美由記¹⁾, 片山愛寸香¹⁾, 寺元文侑子¹⁾, 児嶋沙耶佳¹⁾, 藤田 未来¹⁾,
屋敷 久美²⁾
(聖バルナバ助産師学院103回生¹⁾, 聖バルナバ助産師学院教員²⁾)

7. COVID-19 流行下での育児環境と育児支援サービスの利用状況

○姜 夢¹⁾, 大里 綾香¹⁾, 新谷ほのか²⁾
(地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター 4南階病棟¹⁾)
(元地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター 4南階病棟²⁾)

8. 産後1カ月の母親の授乳行動と産後うつとの関連についての検討

～エジンバラ産後うつ病質問票を用いて～

- 山崎 梨代¹⁾, 米田真由美¹⁾, 杉原 悠雅¹⁾, 土井彩矢果¹⁾, 西原 茉那¹⁾, 松本 和恵¹⁾,
屋敷 久美²⁾
(聖バルナバ助産師学院 103 回生¹⁾, 聖バルナバ助産師学院教員²⁾)

9. 総合周産期医療センターでの産後ケア入院の実際と課題

- 山野 由佳¹⁾, 種池 夏子¹⁾, 西口 理美¹⁾, 宮城 愛莉¹⁾, 和田 聡子¹⁾, 光田 信明²⁾
(独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 看護部 母性部門¹⁾)
(独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 産科²⁾)

第3群【4題】 15:50 ～ 16:14

座長：遠藤 誠之(大阪大学大学院 医学系研究科保健学専攻 生命育成看護科学講座 教授)

10. 助産師の胎児超音波スキル・知識向上のための研修プログラム実践報告

- 金 英仙¹⁾, 吉田 英美¹⁾, 徳永 明美¹⁾
(医療法人竹村医学研究会(財団) 小阪産病院¹⁾)

11. 潮の満ち引きと陣痛発来の関係性 ～過去3年間の助産録からの検討～

- 稲葉 典子¹⁾, 内藤麻実穂¹⁾, 上野 智広¹⁾, 織田 菜実¹⁾, 佐藤菜都子¹⁾, 伊藤 彩¹⁾, 屋敷 久美²⁾
(聖バルナバ助産師学院 103 回生¹⁾), (聖バルナバ助産師学院教員²⁾)

12. 病院で勤務する助産師の技能特性

- 浅見恵梨子^{1), 2)}
(甲南女子大学看護リハビリテーション学部¹⁾), (一般社団法人大阪府助産師会²⁾)

13. A市における育児中の母親の「マイ助産師制度」に関する意識調査

- 西村美津子¹⁾, 石田美佳子¹⁾, 緒方 敏子¹⁾
(一般社団法人大阪府助産師会高槻班¹⁾)

研修会

テーマ：「周産期における理論と実践の融合」

座長：遠藤 誠之 先生（大阪大学医学部 保健学専攻 生命育成看護科学講座 教授）

研修会 1 「外国人妊婦への対応」

9時35分～10時35分

土井 智恵子 先生（りんくう総合医療センター 助産師）

研修会 2 「周産期救急の理論と実践の融合」 10時45分～12時15分

荻田 和秀 先生（りんくう総合医療センター産婦人科部長/周産期センター長）

一般演題

1 郡

1. 新型コロナウイルス感染症妊婦に対する経膈分娩の取り組み

○泉川 良子, 谷口 恵子, 佐野加緒里, 高畠麻由美
地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

【目的】 A 病院で取り扱った COVID-19 妊婦の経膈分娩に対する取り組みやチーム医療について考察する

【実践報告】 2020 年 3 月から 2022 年 4 月まで、17 名の COVID-19 妊婦が経膈分娩を実施した。当初からマニュアル整備や PPE 装着シミュレーションを行うことで、二次感染なく経膈分娩が実施できた。COVID-19 専門病棟や事務局とのチーム医療が必須であり、産科スタッフが主となり調整を行った。分娩や母乳育児に対し意思決定支援を行い、母児分離に対して愛着形成支援をし、産後 1 ヶ月のエジンバラ産後鬱病質問票の平均点数は 2.2 点であった。

【考察】 COVID-19 感染が経膈分娩を阻害する因子にならず、環境やチーム医療体制が整っていれば経膈分娩は遂行できる。COVID-19 感染による隔離や母児分離が、早期に愛着形成促進や家族機能促進の支援を行ったことで、産後鬱病発症の要因とならなかったと理解する。

2. コロナ禍における当院での分娩の取り組み

○番匠谷 麻貴子(Makiko Banshoya)¹⁾, 北野 園枝(Sonoe Kitano)¹⁾, 北野 美代子(Miyoko Kitano)¹⁾, 勝藤 久美子(Kumiko Katsufuji)¹⁾, 江口 美智子(Michiko Eguchi)¹⁾, 高崎 理奈(Rina Takasaki)¹⁾, 根来 英典(Hidenori Negoro)¹⁾, 谷口 武(Takeshi Taniguchi)¹⁾

1) 医療法人 定生会 谷口病院

【目的】 新型コロナウイルス感染症の診断として、PCR 検査が外部依頼となる当院のような一次施設でのこれまでに行った分娩についての対応を紹介する。

【方法】 コロナ感染症はもちろんのこと分娩時は三密により感染リスクが高いと考え、2020 年当初から当院では症状の有無にかかわらずすべての分娩においてコロナ感染症の可能性があると考えた対応を行った。

【結果】 コロナ陽性者の分娩 9 件、分娩後入院中にコロナ陽性を確認した 8 人を取り扱った。分娩後にコロナ感染症が発覚しても、他の患者や職員が感染することなく、また濃厚接触者にもならなかった。

【考察】 コロナ感染の有無にかかわらず、コロナ感染症の感染経路である接触・飛沫感染・特に分娩時に発生するエアロゾルに対するプリコーションを徹底したこと、また分娩室内の換気を行い、環境整備をしたことで院内感染予防が出来たと考える。

3. COVID-19 隔離中に分娩となった母親への産前産後の支援

○伊藤 幸子(Yukiko Ito)¹⁾, 粉川 香織(Kaori Kokawa)¹⁾, 土居 暁(Aki Doi)¹⁾, 今井 明子(Akiko Imai)¹⁾, 谷口 武(Takeshi Taniguchi)¹⁾

1) 医療法人 定生会 谷口病院

【目的】COVID-19 感染者の増加に伴い、当院でも隔離中の分娩を開始した。分娩後の母子の接触について考えさせられる症例を経験したので報告する。

【方法】分娩前に児との過ごし方、授乳方法について感染リスクを含め情報提供し、母親の思いを尊重した支援をおこなった。

【結果】感染リスクを考慮し、全ての母親が母子異室を選択していた。その中で、母子分離になった事で、産んだ実感を得られず、気持ちが落ち込んだ褥婦がいた。そこで、ZOOMを使った画面越しの面会に加え、保育器を使って、実際に児の姿を見ることで、気持ちの安定を図ることができた。

【考察】コロナ禍において、児に感染させないことは重要である。しかし、母子分離による母親の心の葛藤を目の当たりにし、感染対策と、母子の絆を深めていく支援の両立を再認する結果となった。

4. コロナ禍での育児指導経験より得られた母子同室・異室の当院における今後の課題

○草刈 典子(Noriko Kusakari)¹⁾, 山口富士子(Fujiko Yamaguchi)¹⁾, 島津 初美(Shimazu Hatsumi)¹⁾, 英 都貴子(Tokiko Hanabusa)¹⁾

1) 大阪医科薬科大学病院

【目的】新型コロナ感染拡大に伴い、感染妊産褥婦の受け入れのため、母子同室ができなくなり、母子異室への業務変更を余儀なくされたことで見えてきた利点と欠点をもとに、業務改善につなげたいと考えた。

【方法】産科病棟に勤務する3年目以上の看護師・助産師を対象に、母子同室・異室の利点と欠点について半記述式のアンケートを実施し、その結果と過去の文献との比較・照合を行った。

【結果】母子同室・異室を短期間で経験したことで、それぞれの利点・欠点を抽出することができた。経験年数に関係なく、育児手技獲得過程に関するもの、特に授乳に関する場面での問題点が多く挙げられた。過去の文献との大きな相違はなかった。

【考察】with コロナに向けての患者指導や育児支援に関する今後の業務改善や、スタッフ教育に関する当院における課題が明らかになった。

5. A 病院におけるコロナ妊産褥婦専門病棟のケアとマネジメント

英 都貴子(Tokiko Hanabusa)
大阪医科薬科大学病院

【目的】

第一波から現在までの A 病院におけるコロナ妊産褥婦のケアとマネジメントを振り返り、パンデミックが起こった時の最適なマネジメントとはどのようなものかを振り返る。

【方法】

「新型コロナウイルス感染症対応から学ぶ看護マネジメント 10 か条」をもとに自身が管理実践した内容を検討した。

【結果】

コロナ妊産褥婦専門病棟立ち上げ時に 10 か条の内容は知識として知らなかったが、類似した実践は行なっていた。

【考察】

通常の妊産褥婦のケアと並行してコロナ妊産褥婦専門病棟を立ち上げたことにより、スタッフへの精神的・身体的負担が多く及んだ。今回、その時起こったの管理上の問題点に対する対処方法を明文化できた。

2 群

6. コロナ禍における妊婦が抱える不安の実態

○寺田 真理(Mari Terada)¹⁾, 大井美由記(Miyuki Ohi)¹⁾, 片山愛寸香(Asuka Katayama)¹⁾, 寺元文侑子(Fuyuko Teramoto)¹⁾, 児嶋沙耶佳(Sayaka Kojima)¹⁾, 藤田 未来(Miku Fujita)¹⁾, 屋敷 久美(Hisami Yashiki)²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 103 回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

【目的】新型コロナウイルス感染症に対し妊婦が抱えている不安の現状について把握し、妊婦や今後妊娠を考える女性に対する支援について考察する。

【方法】A 病院で妊婦健診を受診した妊婦を対象に無記名自記式質問紙による調査を実施した(回収 100%、有効回答率 90.4%)

【結果】コロナ禍で妊娠することに対して不安を抱える人は7割を占める。晩婚化や不妊治療による妊娠が増加しているなどの背景から、不安を抱えながらも終息が見えない中で、それぞれが考える家族計画を優先し妊娠に至っている傾向にあった。コロナに関する情報源はテレビやスマートフォンが多い傾向にある。また、多くの妊婦がニュースや SNS 等の情報によりさらに不安が増強している。

【考察】ニュースや SNS でも信憑性のある媒体から情報収集することや正確な情報を取捨選択することが大切である。助産師として情報リテラシーを高め、統一した情報提供を実施する必要がある。

7. COVID-19 流行下での育児環境と育児支援サービスの利用状況

○姜 夢(Kang Kum)¹⁾, 大里 綾香(Osato Ayaka)¹⁾, 新谷ほのか(Sintani Honoka)²⁾

1) 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター 4 南階病棟

2) 元地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪急性期・総合医療センター 4 南階病棟

【目的】COVID-19 流行下の育児環境と育児支援サービスの利用状況を明らかにする。

【方法】A センターで分娩後 3 日目の褥婦に独自に作成した質問紙調査を実施、単純集計で分析した。

【結果】COVID-19 流行下において育児場所や支援者の変更があったのは1割以下で、サポート体制に不満を感じる人はいなかった。主な育児支援者は夫で9割以上を占めた。育児支援サービスの認知度は6割以下、利用度は高いもので1割だった。サービスの利用に変更がなかったのは8割、その内6割は利用するつもりはないと答えた。【考察】COVID-19 流行下での育児環境の変化は少なかったが、背景には夫婦で出産・育児を共同することが望ましいとする価値観の強まりがあると考えられる。育児支援サービスの利用度の低さはCOVID-19 流行下の影響のみならず、認知度に関連することが示唆された。新しい生活様式となった今日では、早期からの情報提供や SNS・オンラインなど新たな支援方法の検討が必要である。

8. 産後1カ月の母親の授乳行動と産後うつとの関連についての検討 ～エジンバラ産後うつ病質問票を用いて～

○山崎 梨代(Riyo Yamasaki)¹⁾, 米田 真由美(Mayumi Yoneda)¹⁾, 杉原 悠雅(Yuga Sugihara)¹⁾,
土井 彩矢果(Sayaka Doi)¹⁾, 西原 茉那(Mana Nishihara)¹⁾, 松本 和恵(Kazue Matumoto)¹⁾,
屋敷 久美(Hisami Yashiki)²⁾

1) 聖バルナバ助産師学院 103 回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

【目的】社会問題になっている産後うつにおいて、先行研究で産後1ヶ月時に特に不安が多かった授乳に焦点を当て、心理的問題や必要な支援を考察する。

【方法】出産後1ヶ月健診でA病院に来院した母親に対し、無記名自記式質問紙による調査を実施した。また、エジンバラ産後うつ病質問票(以下「EPDS」)の得点をデータ収集した。

【結果】産後1ヶ月健診におけるEPDS得点が9点以上は4名で全員初産婦であった。相関関係分析では、「授乳方法への満足感と授乳中の幸福感」、「授乳中の幸福感と睡眠満足感」に正の相関、「睡眠満足度とEPDS得点」に負の相関が見られた。

【考察】睡眠不足や家族からのサポート不足は特に産後うつのリスクを増大させるため、妊娠期から産後まで家族や社会資源を巻き込んだ継続した支援が求められている。また、初産婦は漠然と心理的負担を抱えている可能性があり、幅広い視点から産後うつのリスクを予測することが重要である。

9. 総合周産期医療センターでの産後ケア入院の実際と課題

○山野 由佳(Yuka Yamano)¹⁾, 種池 夏子(Natsuko Taneike)¹⁾, 西口 理美(Rimi Nichiguchi)¹⁾,
宮城 愛莉(Airi Miyagi)¹⁾, 和田 聡子(Satoko Wada)¹⁾, 光田 信明(Nobuaki Mitsuda)²⁾

1) 独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 看護部 母性部門

2) 独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 産科

【目的】当院では2018年から産後ケア入院受け入れを始めた。申し込みがあれば断らないスタンスで産後ケア入院を受け入れており、その実際について事例を通して紹介する。

【実践内容】出産後4ヶ月までの褥婦を対象とし、特定妊婦や精神疾患合併の褥婦も受け入れており、当日の受け入れ依頼も可能な限り断らない。2020年のコロナ渦以降も受け入れに制限は設けていない。

【結果】乳房ケアや授乳指導を中心に援助を行う場合もあるが、話し相手がほしいという1人育児をしている方には何時間も話をすることもある。療育手帳を保持しヘルパーの支援を受けて育児しているケースでは、母自身のケアに時間をかけることもあった。ひとつとして同じものはない個別性を重視した産後ケアを提供している。【考察】今後ますます産後ケアの需要は高まると予想される。限られたスタッフ数で対応していくためにはスタッフの育成や提供できるケアの充実などが求められる。

3 群

10. 助産師の胎児超音波スキル・知識向上のための研修プログラム実践報告

○金 英仙(Youngsun Kim)¹⁾, 吉田 英美(Emi Yoshida)¹⁾, 徳永 明美(Akemi Tokunaga)¹⁾
医療法人竹村医学研究会(財団)小阪産病院

【目的】助産師の超音波スキル・知識向上のための研修プログラムとその実践について報告する。

【方法】第60回大阪母性衛生学会学術集会にて報告した、実態調査結果を基に、臨床超音波技師(産科)と研修プログラムを構築し、研修プログラムをA施設に勤務する助産師15名に実施した。

【結果】研修内容は、①超音波の基礎知識とスキル、画像診断に関する講義、②ファントムや実妊婦をモデルに、臨床超音波技師(産科)によるハンズオンでの実践と、講義で得た知識を活かした画像診断の研修、③画像診断に関する自己研修の3点とした。研修に参加した助産師から、「こんな研修が受けたかった」「これまでの操作方法よりも簡単でわかりやすい」という意見があった。

【考察】今後、本研修プログラムの効果を評価し、より洗練することが課題である。本報告は発表者所属施設の倫理委員会で承認を得ており、公益信託中西睦子看護学先端的研究基金の助成を得ている。

11. 潮の満ち引きと陣痛発来の関係性 ～過去3年間の助産録からの検討～

○稲葉 典子(Noriko Inaba)¹⁾, 内藤麻実穂(Mamiho Naito)¹⁾, 上野 智広(Chihiro Ueno)¹⁾,
織田 菜実(Orita Nami)¹⁾, 佐藤菜都子(Natsuko Sato)¹⁾, 伊藤 彩(Aya Ito)¹⁾, 屋敷 久美(Hisami Yoshiki)²⁾
1) 聖バルナバ助産師学院103回生, 2) 聖バルナバ助産師学院教員

【目的】潮の満ち引きと陣痛発来の関係性について調査・検討し、今後の分娩進行予測に役立てたい。

【方法】3年間の対象の助産録より収集したデータを大潮グループと小潮グループで合計した。各グループに該当する日数で割り、1日あたりの平均陣痛発来件数を算出しt検定を行った。合わせて、満月、新月、上弦、下弦の各期で分散分析を行った。

【結果】大潮グループと小潮グループにおける陣痛発来数の比較では、有意差は認められなかった。また、4つの各月齢に分けて行った分散分析においても有意差は認められなかった。

【考察】潮の満ち引きと自然陣痛発来に焦点を絞って分析を行ったが有意差は認められなかった。1地域のみの調査であり潮汐は地域特性によって潮差が異なること、地球の自転によって月も変化するため観測地が異なると自然陣痛発来との関係性が異なる可能性がある。これらから、調査期間や他の地域との関連も考慮するなどの検討が必要であった。

12. 病院で勤務する助産師の技能特性

○浅見恵梨子(Eriko Asami)^{1), 2)}

1) 甲南女子大学看護リハビリテーション学部, 2) 一般社団法人大阪府助産師会

【目的】病院で勤務する助産師の技能の特性を開業助産師の技能との対比によって捉え、助産師の技能形成における課題について考察する。

【方法】就業場所が病院の者2名、助産所の者4名の計6名の助産師に対し、個別に半構造的インタビューを実施した。病院業務で形成される技能について、開業助産師の技能と対比してどのように認識しているかを語ってもらい、質的帰納的に分析した。

【結果】病院業務で形成される技能は、リスクのある妊産婦や新生児をケアし家族形成を支援できる、多職種と協働・連携できる、組織の中で働くであった。しかし、正常経過の分娩のアセスメント力、妊婦の生活背景を把握する力、見通しを持って授乳を支援する力は、熟練が難しい技能と認識されていた。

【考察】熟練が困難と認識されている技能は助産師の専門的スキルといえる。病院では時間をかけて個々の対象と関わるのが難しく、これが技能の熟練を阻む要因の一つになっている。

13. A市における育児中の母親の「マイ助産師制度」に関する意識調査

○西村美津子(Mitsuko Nishimura)¹⁾, 石田美佳子(Mikako Ishida)¹⁾, 緒方 敏子(Toshiko Ogata)¹⁾

1) 一般社団法人大阪府助産師会高槻班

【目的】本調査はA市における「マイ助産師制度」導入の為、現在育児中の母親の「マイ助産師制度」についての認知度を知り、助産師に求めている支援を明らかにすることを目的とした。

【方法】A市にある産科診療所・病院・助産所・子育て支援センターにおいてアンケート調査用紙を配布し、結果を集計した。

【結果】妊娠中・産後に助産師に相談したいと思ったことがある人は、妊娠中は62.5%、産後は79.8%であった。「マイ助産師制度」について全く知らないと答えた人は77.9%であったが、「マイ助産師制度」があれば利用したいと答えた人は65.4%であった。

【考察】結果より、A市の母親の多くは「マイ助産師制度」があれば利用したいと望んでいると考える。今後はA市の保健センターと連携しながら、「切れ目のない母子支援」の充実を目指し、「マイ助産師制度」を取り入れていくよう進めていきたい。

キーワード：マイ助産師制度、切れ目のない母子支援、保健センターとの連携